慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦後日本の集合住宅におけるエレベーターの技術社会史： 人間とテクノロジーの連関に注目して
Sub Title	
Author	水田, 綾奈(Mizuta, Ayana)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2023
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.28 (2023. 7) ,p.128- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2022年度三田社会学会大会報告要旨
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20230701-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦後日本の集合住宅におけるエレベーターの技術社会史
――人間とテクノロジーの連関に注目して――

水田　綾奈

１．研究の背景と方法

本研究の目的は、戦後日本において、エレベーター（以下、EV）という垂直の移動を支えるテクノロジーが、いかに人びとの日常生活と結びつき、変化をうみだしてきたか、あるいは、日常生活との関わりを通して、EV自体がいかに変化してきたかという、テクノロジーと社会の連関の諸相を明らかにすることである。日本においてEVは、戦後、都市における集合住宅という居住形式の広まりとともに規格化が進められ、人びとの生活実践をふまえながら開発・改良が行われた。これをふまえ本研究は、技術決定論や社会構築主義といった、変化の作用を一方向的に捉える見方ではなく、EVと集合住宅の生活実践との「連関」（Latour 2005=2019）に注目する視座から、EVそれ自体や集合住宅における生活がいかなる変容を遂げてきたのか、そのプロセスを辿ることで、都市の生活が、テクノロジーと社会との深い結びつきの中で成立しているという事実を示していく。

調査方法としては、EV関連の業界誌（『エレベータ界』）やメーカーの技術報（『三菱電機技報』『日立評論』）、新聞記事（『読売新聞』『朝日新聞』）などの資料に基づく文献調査を行い、EVの開発過程や設置の状況、当時の集合住宅での居住の様子について、包括的に検討を行った。なお本報告では、EVと集合住宅の生活実践の変化に注目する点で、両者が結びつく初期の段階を対象とし、規格化されたEV（以下、規格形EV）が登場し、普及が拡大した1950年代後半から1970年代を中心に発表を行った。

２．規格形EVの開発と集合住宅への浸透

EVが日本にはじめて登場した1890年以降、戦前のEVはオーダーメイドでの製造が中心であり、大型の事務所ビルや百貨店といった空間で、豪華さや豊かさを演出する「アトラクション」のようなモノであった（田中 2017）。しかし戦後、都市部における住宅不足解消の手段として集合住宅の大規模化・高層化が図られる中で、EVは、寸法や形状、運転方式といった仕様の規格を定め、安価で実用的であること、かつ人びとの日常生活に溶け込むことがめざされるようになった。

そこで、仕様の規格化にとりわけ影響を与えたのが、若い夫婦と幼い子供によって構成される核家族世帯の生活実践であった。当時の技術報によれば、規格形EVの寸法や扉の形状は、「ピアノ・ダブルベッドなどの大型家具の運搬も楽にできる」（日立評論社 1970: 92）よう設計が組まれ、また昇降速度は、「成人男女（子どもを抱いた状態も含め）について調査」（奈良・浦田・中村 1984: 63）した内容に基づき決定されたという。このように、規格形EVの開発は、集合住宅における家族の生活

水田綾奈「戦後日本の集合住宅におけるエレベーターの技術社会史――人間とテクノロジーの連関に注目して」『三田社会学』第28号（2023年７月）　128－130頁

実践を組み込みながら、仕様の調整が行われていた。

また、1960年代の規格形EVは、呼び出しボタンが「上／下」や「△／▽」のように統一されていなかったり、非常停止ボタンが誰でも操作できるようになっていたり、換気扇が埋め込まれているEVもあれば、扇風機が後付けされているEVもあったりなど、日常生活における利用者との調整の中で、EVに関わるさまざまなモノが、さまざまな形状で存在していた（エレベータ博物館 2022）。しかし、規格形EVが普及し、日常的に利用されるにつれ、「上／下」ボタンが淘汰され、かご内扇風機を外付けする必要性がなくなっていくなど、人びとの操作性や快適性をふまえた変更を経て、EVを構成するモノの形は徐々に定まっていった。

このように、規格形EVは、人びとの生活実践とのかかわりの中で、モノとしての形を少しずつ調整させていった。

一方で、規格形EVが日常的に利用される中で、集合住宅の生活実践にも、さまざまな変化が生み出されることとなった。

たとえば、集合住宅内での縦の移動に際して、居住者は、階段とEVをうまく使い分ける技法を身につけていった。高層住宅のEV利用に関する調査によれば、「多くの場合居住者は入口階（基本的に地上階）と居住階との移動でのみエレベーターを利用」し、「3階までの居住者の移動および各階床間の移動には、階段が使用されることが多かった」という（弓仲・関田・平澤 1971: 55）。居住者にとって、集合住宅のEVは、複数の居住者によって利用される共用設備であり、思いどおりに運転できず、ときに長い「EV待ち」を強いられるような、「焦燥感」を募らせる装置であった（吉武 1962: 20；寺園・松倉編 1994: 66）。そのため、人びとは階段との「使い分け」の技法を身につけたり、EVの現在地を示すインジケータや、喫煙者向けの灰皿をEVホールに設置するといった「気逸らし」の工夫が新たになされたりすることで、「焦燥感」という、EVによってもたらされるようになった感覚にどうにか対処しようとした。

また、こうした居住者個人の身体技法や感覚のみならず、人びとの日常的なコミュニケーションのあり方にも変化が生じた。たとえば、集合住宅のEV内部という、狭小な密室空間において、他の居住者と乗り合わせる場面は、匿名的な他者と過剰に接近することが求められる点で、独特の「気まずさ」として経験されるようになった。そこで、人びとは「気まずさ」をやりすごすために、マナーや会釈によって親密な関係を仮構したり、あるいは視線や挨拶を全く交わさず、他者の存在を意図的に消去したり、そもそも乗り合わせが生じないように乗車するタイミングをずらしたりといった、相互行為における新たな技法も身につけていった。

集合住宅での生活にEVが浸透していく過程では、「EV遊び」や「EV犯罪」といった問題も新たに生じることとなった。EVの利用が日常的になるにつれ、子どものボタンや扉へのいたずらを原因とする、閉じこめや扉への挟まれ、EVシャフトへの落下といった事故や、EVという密室空間内での痴漢や暴行といった犯罪が社会問題として捉えられるようになった（石川 1984；『朝日新聞』、1971.6.14朝刊など）。こうした問題に対しては、集合住宅のEVが「安全な乗り物」となるよう、メーカーや管理組合のほか、学校や警察といったアクターによる、子どもや女性の利用者に対する「規律訓練」や、防犯窓や防犯カメラの設置、防犯運転装置といった、不審者への「環境管理」などが行われ、問題を引き起こす相互作用の組み換えが取り組まれていった。

このように、集合住宅のEVは、人やモノのさまざまなアクターが、互いに作用し、性質を交換しあい、時に問題をうみだしつつ、連関を調整しあうことを通して、都市の「インフラ」と成っていったのである。

３．まとめと今後の課題

以上より、戦後日本において、規格形EVが開発され、集合住宅を中心に普及が進む中で、モノとしてのEVと集合住宅の生活実践が結びつき、EVの仕様の規定や、利用者の身体技法・感覚の創出、集合住宅のEVをめぐる問題の発生とそれへの対応といった、さまざまなアクターの変化やエージェンシーの生成が織りなされてきたことを確認した。このような、戦後日本の集合住宅において生成された、EVをめぐる多様な出来事を詳細に記述した点で、本研究はEV（＝テクノロジー）と生活実践（＝社会）とが密接に連関しあい、互いに成立していることを示唆したといえる。

しかし、本研究は、対象を「戦後日本の集合住宅」に限定しており、それのみでEVと社会の関係を包括的に捉えられたとはいいがたい。今後は、EVをめぐる社会的世界について、異なる空間においても検討を行うことで、これを相対化して考察していきたい。

参考文献

エレベータ博物館，2022,「エレペット（初期）」,（2022年６月28日取得，https://elevator.information.jp/mitsubishi/elepet-shoki.html）.

日立評論社，1970,「規格形エレベータ“日立ビルエース”シリーズ完成―わが国初の機械室ユニット化に成功」『日立評論』，52(5):92.

石川理一，1984,「エレベーター利用上のマナー～知っておきたいマナーのかずかず～」『エレベータ界』，19(74): 4 -13.

Latour Bruno ，2005，Reassembling the social: An introduction to Actor-Network-Theory, Oxford: OUP.（伊藤嘉高訳，2019,『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.）

奈良・浦田・中村，1984,「低・中層ビル向けエレベーター「日立ファミリーエース」の開発」『日立評論』，66(3): 61-66

田中大介，2017,「第６章 高層建築・昇降機 —— 昇り／降りる」田中大介編『ネットワークシティ 現代インフラの社会学』北樹出版：91-106.

寺園・松倉編，1994,『エレベーターハイテク技術 世界最高速度への挑戦』オーム社.

吉武泰水，1962,「高層アパートエレベーター利用調査」『調査研究報告集』日本住宅公団.

弓仲・関田・平澤，1971,「高層住宅におけるエレベータ計画」『高層住宅用エレベータ特集』『日立評論』，53(10): 55-60.2

（みずた　あやな　慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程）